

第41回 日文研フォーラム

■

チェコスロバキアにおける日本美術

Japanese Art in Czechoslovakia

■

リブシェ・ボハーチコヴァー

Libuše Boháčková

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛

● テーマ ●

チェコスロバキアにおける日本美術

Japanese Art in Czechoslovakia

● 発表者 ●

リブシェ・ボハーチコヴァー

Libuše Boháčková



発表者紹介

リブシュェ・ボハーチコヴァー
Libuše Boháčková

プラハ・ナープルステク博物館元日本部長

- 1927年 チェコスロバキア・プラハ生まれ
1951年 カレル大学卒業
1967年 カレル大学博士号取得
1963～1991年 ナープルステク博物館日本部長
1991～1992年 国際日本文化研究センター客員教授

主な出版物

- 1983-1987 Japanese Stencils in the Naprstek Museum Collection
1997 Vejir a mec(「日本文化史」)V.ヴィンケルヘーフェロヴァー
共著
1989 Warrior-Prints of Utagawa Kuniyoshi in Czechoslovak
Collections

訳書

- 谷崎潤一郎 「春琴抄」(1969)
上田秋成 「雨月物語」(1971)
井上靖 「獵銃」「通夜の客」「闘牛」(1987)
遠藤周作 「海と毒薬」(1980)「沈黙」(1987)

去年の秋頃に講談社の「秘蔵日本美術大観」というシリーズとの関係で、プラハで保存されている日本美術の収集のことが朝日新聞に掲載されました。その記事は、日本人にとってチェコスロバキアの日本美術コレクションが意外な発見だと述べていますが、実際に上記のコレクションの存在は、色々な展覧会、カタログや口頭の発表を通して、国内だけでなく海外でも知られています。又、日本でもチェコスロバキアの日本美術コレクションは全然知られていないとも言えます。というのは、ヨエ・ホロウハ(Joe Houcha)という一番重要な日本美術のチェコ人のコレクターのことは、すでに明治三九年と昭和元年、即ち彼の二度の日本滞在中に日本の新聞で報道されました。

プラハの日本美術コレクションの歴史を説明する前に、まず過去三七年間にチェコスロバキアで開かれた日本展覧会について、少し話さなければなりません。そうすれば日本美術についての一般のチェコ人の観念と、チェコスロバキアの日本美術コレクションの特徴がはっきりすると思います。

日本の美術の作品は、チェコスロバキアの色々な町、色々な美術館、又貴族によって建てられた宮殿やお城で見られますが、日本美術を体系的に集めて専門的に整理している所は二つしかありません。即ち、プラハのナープルステク(Naprstek)

博物館とプラハ国立美術館です。一九五四年から昨年までの間にチェコスロバキアでは少なくとも八〇の展覧会が開かれ、日本美術品、工芸品や民俗学的な資料が出品されました。そのなかで日本側から送られた巡回展は一七しかありませんでした。それらの展覧会の出展作品は、大体運搬しやすいものだけ、即ちポスター、写真、おもちゃ、書跡や版画などでした。知識人の間で一番高い評判を取ったのは、十五年前にプラハとカルロビ・ワリ(Karlovy Vary)温泉で開かれた斉藤清の版画展でした。

しかしながら、以上の八〇の展覧会のうち、すくなくとも四分の三はプラハの日本美術コレクションの作品で構成されていきました。六〇年代に葛飾北斎の生誕二〇〇年記念としてプラハ国立美術館は「日本のグラフィック・アート」という大規模な展覧会を開催しました。プラハのナールプステク博物館で開催の、公共及び個人コレクションで構成した根付けと印籠の展覧会は大当たりで、ほぼ三年間続きました。その後、日本刀の刀装品が展示されました。鍔、目貫、縁頭、小柄や笄は男の装身具として鑑賞され、一般の入館者だけでなく、金工の専門家にも好評でした。

七〇年代には「形の秘密」という日本の陶器、とくに民芸作品の展覧会がプラ

ハと陶器の故郷であるベヒネ(Beckhne)という南ボヘミアの町で開かれました。出展作品の大部分はハドリチカ(Hrdicka)夫妻の個人コレクションでした。中国と日本の学者であるハドリチカ大使と夫人は、素晴らしい作品を集めて「日本の日常の陶器」という本を書きました。ビンケルヘフェル(Winkelhoefer)駐日チェコスロバキア大使夫妻が前回来日のおりに系統的に収集された、おもちゃの展示会は大変な人気を博しました。

展示作品を面白く組み合わせる展示会も行われました。例えば、ナープルステク博物館での「日本と中国の美術における菊」という展示会は、本物の菊のそばに菊を描いた絵画と菊の模様で飾られた色々な工芸品が展示されました。「線と音調」という展示会の面白い点は、日本の楽器と楽器が主題の浮世絵との組み合わせでした。「東洋人物絵画」というモラビアのブルノ(Brno)で開かれた展示会には、プラハ国立美術館所蔵の日本と中国の作品が一緒に出品されました。そのプラハ美術館はプルゼン(Pilsen)という西ボヘミアの町で大胆な展示会を開きました。同じ屋根の下に中国の唐時代陶器と初期の浮世絵が陳列されました。「型紙の魅力」というタイトルの展示会には、ナープルステク博物館の所蔵品から選ばれた一〇〇枚の型紙だけでなく、型染めの裂や参考として使った浮世絵も展示されました。

ナープルステク博物館の豊富な浮世絵コレクションからも、多様な作品が出品されました。例えばプラハでは、広重の東海道と上方役者絵の展覧会が開かれました。そして浮世絵の風景と花鳥画と「武士の誉れ」という武者絵の展覧会はボヘミアとモラビアの色々な町を巡回しました。最近、チェコスロバキアも日本刀と東洋の武芸への興味が強くなっていたので、この展覧会は大当たりでした。

私が紹介したこのような展覧会は全部、いわゆる特別展でした。現在、プラハに日本美術の常設展はありませんが、一九七七年以降、プラハから四〇キロ離れたリビエホフ(Libechov)のバロック風の宮殿では、ナープルステク博物館のアジア・コレクションの常設展が開かれています。宮殿には二十一の部屋があり、三つのホールの中には凡そ三〇〇〇点の日本美術品が飾られています。展示された作品は現在凡そ一万八千点の日本美術コレクションの六十分の一にあたるものです。

ナープルステク博物館所蔵の日本美術と工芸作品の大部分は江戸時代の物です。最も古いものは縄文と弥生の陶器の残欠で、鎌倉時代の来迎図、室町時代ごろの漆器と鐔などがあります。一番多いのは浮世絵、特に幕末の作品です。プラハの浮世絵コレクションの特色は上方役者絵とされています。

ナープルステク博物館のコレクションは明治の頃に日本人の日常生活に使われ

たさまざまな物を集めたものです。このような西洋人にとって珍しい物の中には、例えば扇子、下駄、草履、着物、矢立て、煙草入れ、蛇の目傘、逗子、椀、提灯、おもちゃ、火鉢、香合、袱紗、袷袋、枕、筆、お守りなどがありました。今日の日本人にとっても珍しい物が明治の頃には、博物館のコレクションに加えられたのです。その中には、日露戦争の頃に手に入れた葉屋の模型もありました。陶器の葉入れの中には色々な動物の灰と骨が今でも残っています。墨で書かれた漢字を読めば、白鷺の骨は月経のトラブルを治すなど、面白い情報が分かります。

前述の二万点に及ぶナープルステク・コレクション、そしてプラハ国立美術館の凡そ五千点の所蔵品、また色々な地方の博物館、美術館、宮殿などの所蔵品や個人蔵の作品はいつ、どのようにしてチェコスロバキアに入ったのでしょうか？ ヨーロッパ貴族の日本美術に対する関心は、一六世紀から始まり一八世紀の後半に、即ちロココ様式時代に、最盛期となりました。貴族によって建てられた宮殿の、いわゆる「好奇心の部屋」には、異国のさまざまな珍しい物が飾られました。その中で一番評判の高かったのは、東洋の陶器や漆器などの工芸品でしたので、早くから優れた東洋の技法とエキゾチックな図柄がオランダのデルフトやドイツのマイセンで真似られました。中国と日本の作品を細かく区別せず、陶磁器には

英語の“china”という言葉をあて、多種多様な漆器には“japan”という言葉を使用しました。英語の名詞は簡単に動詞として使えるので、日本の国の名前さえ動詞となりました。“to japan”という変な言葉は、「漆を塗る」とか、「漆器の作品を作る」という意味で使い始めました。江戸時代初期から中期にかけて、オランダの東インド会社を通して、沢山の日本の陶磁器と漆器がヨーロッパに輸入されました。日本が輸出用に作った陶器と漆細工はポヘミアとスロバキアの貴族の手にも入りました。チェコスロバキアのもとで全部の宮殿は、伊万里、九谷や薩摩焼の皿、壺、椀、そして漆の筆筒や家具で飾られました。

共産党支配の始まった頃、即ち四〇年代の後半に、貴族の財産は全部没収されてしまいました。宮殿に収蔵されていた美術品は、美術館又は別の宮殿か城へ移されました。ナープルステク博物館とプラハ国立美術館のキュレーターは、東洋美術館の整理をするように頼まれましたので、お城のコレクションの状態が大体分かってきました。宮殿のオリエンタル・アート・コレクションで一番大事なのは、北モラビアのハラデツ・ウ・オパヴィ(Hradec u Opavy)城のコレクションです。リフノフスキー(Lichnovsky)伯爵の友達であったベートーベン(Beethoven)が度々滞在した、この宮殿の日本コレクションの特色は江戸初期の鞍と江戸中期の

陣笠です。一六四四年に制作された蒔絵の鞍は鳳凰の図柄があり、その四十年後に彫られた堆朱の鞍は龍の模様で飾られています。珍しい鉄製の陣笠は明珍宗安という一八世紀の鍛冶の銘があります。金や銀の象眼の模様のモチーフは雅楽の楽器です。このような各地方の日本コレクションの歴史と特徴を述べたいのですが、今回は一番規模の大きい公共コレクションの問題に集中したいと思います。

今までナープルステクという言葉が何度も出ましたが、このチェコ語の意味は人の名前で、「指貫き」です。ナープルステクは、現在チェコスロバキアで一番大きな日本美術を収蔵している博物館の創立者です。ヴォイチェハ(Vojtech)又はヴォイタ・ナープルステク(Vojta Naprstek)は、一八二五年にプラハの酒屋さんの家で生まれ、学生の時代から遠い外国の文化に深い興味を持っていました。法律の勉強や中国学と日本学の講義を聞くために、ウィーンに行き、四八年の革命に参加したので、オーストリア警察に捕まえられないように北アメリカへ逃げました。十年後、母親の努力のお陰で、彼は恩赦に浴して帰国することができました。ナープルステクがボヘミアへ持って帰ったダコタ・インディアンのコレクションが博物館の民俗学部の基礎となりました。

しかし、ナープルステクの特別な興味の対象は、アメリカとイギリスの技術で

した。一八六二年にロンドンの万国博覧会の時に、サウス・ケンジントン工芸博物館に感動して、ボヘミア工芸博物館を創立しました。面白い事に、両博物館の収集計画は次第に変わり、民俗学資料と美術品が収集され始めました。サウス・ケンジントン博物館は、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館になり、ナープステクのボヘミア工芸博物館は最初、一般民俗学博物館、後にヨーロッパ以外の国々の美術品と民俗学資料を収集する博物館となりました。ボヘミア労働者の骨の折れる手仕事を廃止するために、ナープステクは新しい機械を紹介しようとなりました。民主主義者であった彼の関心は、女性の教育の権利と男女同権を達成する事でした。ナープステクが一八六五年に創立した、いわゆる「ボヘミア婦人のアメリカン・クラブ」は講演会をしたり、遠足に行ったり、貧乏なプラハ市民を援助したりしました。しかしながら、クラブの会員のために一番大切な場所は、ナープステク博物館の図書館と閲覧室でした。これは博物館の図書館の蔵書が中心となって作られたもので、段々豊富になり、日本と日本美術についての本や雑誌も沢山収蔵されるようになりました。

ナープステクの多様な活動を一番よく手伝ったのは、彼の配偶者でした。ナープステク夫人(Josefa Naprstkova)は、夫とともに熱心に日本の美術を収集しま

した。ナープルステク夫妻はプラハだけでなく、外国、特にドイツとオーストリアの骨董屋から日本の作品を購入しました。またパリ、ロンドン、ウィーンの万国博覧会の折に、日本美術のコレクションの規模が拡大されました。ウィーンの万博、即ち一八七三年に、ナープルステクは日本の展示の担当者から博物館のために色々な面白い物を手に入れ、日本大使館からは和紙の見本のコレクションを貰いました。

一九世紀の博物館の目録は非常に面白いものです。寄付した人の中には、沢山の一般のチェコ人の他に有名な政治家、科学者、作家や画家の名前が記載されています。ナープルステクの家と図書館をしばしば訪問したのは、ユーリウス・ゼイエル (Julius Zeyer) という優れた作家でした。この教養の豊かな作家は小説、叙事詩や劇の主題に、よく異国の神話や小説を選びました。彼はインドやヘブライ、エジプト、ケルト、中国をモチーフにした他、日本の文学や神話にもインスピレーションを得ました。ゼイエルの日本を主題とした作品の中で一番有名なのは、「権八と小紫」 ("Gompaci a Komurasaki") という小説です。序文にゼイエルは次のように述べています。「私を魅惑した日本は、ナープルステク氏の本で発見した日本ではありませんでした。いえ、別の日本でした。私たちの心に鮮やかに、カ

ラフルに語りかけるこの国の版画、刺繍、扇子そして金で描かれた漆や七宝の花
瓶と皿、このような作品の故郷である日本でした。」

ゼイエルは実際にさまざまな美術品に囲まれて生活していました。彼のオリエ
ンタル・アート・コレクションの主要部分は、中近東の工芸品です。パリの万国
博覧会で手に入れた日本の作品は、彼のインスピレーションの源泉となったと思
われます。ゼイエルはヨーロッパや北アフリカ、中近東を回りましたが、遠い日
本までの旅行にはお金が足りませんでした。初めて日本からコレクションを持っ
て帰ったのは、ヴァーツラフ・ステイスカル (Václav Stejskal) という海軍将校で
した。彼はオーストリア軍艦アウローラ号に乗り、一八八六年から一八八八年ま
で全世界を回るうちに、神戸までやって来ました。彼の収集品の中には、例えば
大きな厨子や槍、刀、お坊さんの衣、籠、七宝細工などがあります。

ステイスカルは一般のチェコ人には知られていませんが、一八九〇年代に全世
界を旅行したエンリコ・スタンコ・ヴラーズ (Enrico Stanke Vraz) とヨセフ・コ
レンスキー (Josef Korensky) という自然学者の旅行記は、ボヘミアで有名になり
ました。彼等が集めた日本の工芸品は、今もナールプステク博物館に保存されて
います。コレンスキーは初めて日本へ来た時、一カ月しか滞在しませんでした、

この短い時間を有効に利用して、面白い本を書くことができました。一九八五年に「明治のジャポンスコ」の題名で日本語訳もできた彼の本は、ボヘミアで大変な人気を得て、他の旅行者や作家の参考になりました。

コレンスキーの甥であったヨセフ又はヨエ・ホロウハ (Joe Hloucha) は「嵐の中の桜」(“Sakura ve vichric”) という、お涙頂戴の小説を書きました。この大当りになった本は一九四八年までに十二版を重ねました。この作品とホロウハの次の日本の主題の小説は、チェコ文学史上、大した作品ではありません。しかし、作家の日本についての驚くべき知識を窺うことができます。ホロウハの最大の貢献は日本美術の収集です。彼は日本だけでなく、他のヨーロッパ以外の国々の作品とチェコ・ゴシック彫刻も集めました。とにかく、彼はチェコスロバキアで一番重要なオリエンタル・アートの収集家とされます。今日のナープルステク博物館所蔵の日本美術品の大部分がホロウハのコレクションです。彼の重要な絵本のコレクションは現在、プラハ国立美術館で保存されています。

ホロウハは様々な種類の日本美術品や民族学資料を集めました。その中で一番重要なのは浮世絵のコレクションです。彼のこの分野での活動はチェコの浮世絵収集の発展に決定的な影響を及ぼしたと思われる。

二十世紀の始めに日本から貴重な浮世絵コレクションをプラハに持って帰ったのは、プラハ出身のドイツ画家でグラフィック・アーティストでもあったエミル・オルリク(Emil Orlik)だ。彼は、パリで一八九八年に見た浮世絵に深い感銘を受けました。一年間の日本滞在中、オルリクは木版画の技法を学び、「日本から」(Aus Japan)という一五枚の木版画シリーズを制作しました。彼は伝統的な日本の木版の技法を用いて日本の風景を美しく描写しました。残念なことに、オルリクの優れた浮世絵コレクションは一部しか残っていません。今でもプラハ国立美術館で保存されているこのコレクションの中には、初期の面白い版画があります。一九七三年にプラハで開かれた「日本の木版画」という展覧会には、例えば、元オルリク・コレクションの鳥居清信一世、清信二世、奥村政信、石川豊信、湖龍齋、勝川春章などの絵師の作品が展示されていました。

「日本の木版画」展には、ボヘミア文学文庫で保存されているカラーセク(Jiri Karasek ze Lvovic)、レシエフラド(Emanuel z Lesehrad)とボウシユカ(Sigismund Bouska)という作家たちによって集められた浮世絵も出品されました。カラーセクは代表的なチェコ・デカダンスの詩人であり、レシエフラドは日本の短歌をドイツ語から翻訳して“Nipponari”という詩選集を出版しました。この二人に加

えて、日本でも有名になったアルフォンス・ミュシャ (Alfons Mucha) というアル・ヌーボールのアーティストが、当時のボヘミア・ジャポニスムの典型的な芸術家たちでした。

しかし、浮世絵を収集したチェコ文化人の中で一番重要なのは、シギスムンド・ボウシュカというベネディクト会修道士で、彼はフランス文学の翻訳者でもありました。彼はドイツの浮世絵研究家ユーリウス・クルト (Julius Kurt) の相談を受けて、総合的な浮世絵コレクションをつくることができました。一九一三年にプラハとブルノで開催された浮世絵の展覧会には、六〇〇点以上の版画と四〇〇点の墨絵が展示されました。その大部分がボウシュカのコレクションで、その他はクルト、スッコ (Succo) とソウチェク (Soucek) の収集した作品でした。この展覧会の興味深いカタログを見ると、浮世絵の作品は江戸初期から明治時代まで年代順に整理されていたことが分かります。ある作品にはボウシュカの説明も記されています。

エミル・オルリクと同じように明治末頃に日本で浮世絵を収集したのは、ボヘミア出身の面白い人、カレル・ヤン・ホラ (Karel Jan Hora) です。彼は技師で、アメリカのシカゴで日本語を勉強し、日本に来て大阪ガス会社の支配人となりま

した。四年間の関西滞在中に、ホラは浮世絵、特に上方役者絵を収集して、ナーブルステク博物館に寄贈しました。ホラは横浜に引越し、若いボヘミア建築家、ヤン・レッテル(Jan Letzel)と一緒に東京で建築会社を創設しました。日本に今でも残っているレッテルの作品の中で一番有名なものは、広島元産業奨励館、現在の原爆ドームです。第一次世界大戦の二年目、その建物がちょうど完成した頃に、ホラは家族を連れて帰国するつもりで日本を離れました。ホラの故郷、チェコスロバキアのポチェブラディ(Podebrady)温泉に住んでいたルドヴィーク・クバ(Ludvik Kuba)という優れた画家が、ホラの日本出身の配偶者の肖像を描きました。東洋文化に深い興味を持っていたクバに、ホラは浮世絵をお礼に渡しました。この二〇枚の上方役者絵を、中国唐時代の副葬品や宋時代の仏像、チベットの曼陀羅などとともに、クバの息子がナーブルステク博物館に寄贈しました。

カレル・ヤン・ホラはボヘミアの最初の日本学者と考えられています。この忙しい実業家は鴨長明の「無名抄」の部分を選んで翻訳し、一九〇六年に Transactions of the Asiatic Society of Japan で発表しました。一九〇四年にプラハで “Duse Japonska” (日本の心) という本を出版しています。この美しい、日本の画家の表紙の本は、新渡戸稲造の「武士道」です。翻訳者はカレル・ヤン・

ホラでした。

面白いことに、ボヘミアでオリエンタル・アートに対して興味と理解を示したのは、美術評論家や美術史家よりも芸術家自身でした。当時、東洋美術の主要な収集家は、ルドヴィーク・クバ、ヴォイチェハ・ヒチル (Vojtech Chytil)、エミル・フィラ (Emil Filla)、フランチシェク・ケツェク (Frantisek Ketzek) とアドルフ・ホフマイステル (Adolf Hoffmeister) などの画家たちでした。カラー・エッチングの分野で新しい道を開いたフランチシェク・ケツェクというグラフィック・アーティストはパリで素晴らしい浮世絵を買いました。現在ナープルステク博物館所蔵の元ケツェク・コレクションの中には、勝川派の役者絵と珍しい北斎の六歌仙シリーズの二点があります。在原業平と文屋康秀の葦手絵的に表現された姿がボヘミアの芸術家たちを感動させたことは、想像に難くありません。

以上、ナープルステク博物館の日本美術コレクションを紹介して来ましたが、最後にプラハ国立美術館のコレクションの歴史にも、少々触れたいと思います。現在、約五千点の日本美術コレクションがプラハ美術館の「ヨーロッパ以外の国々の美術部」に保存されています。これは一九五二年にルボル・ハーイェク (Lubor Hajek) というインド学者の努力の結果として創立され、プラハ郊外のズブラストラ

フ (Zbraslav) 宮殿に設置されています。

日本美術コレクシヨンの基礎になった作品は、プラハ国立美術館のグラフィック部とプラハ工芸美術館の元収蔵品でした。この四〇年間に、いろいろな個人蔵の作品が日本美術コレクシヨンに加えられました。元の所蔵者のリストの中には、エミル・オルリク、シギスムンド・ボウシュカ、ヨエ・ホロウハ、エミル・フィラ、ヨセフ・ステクなど、チェコの文学者や芸術家の名前があります。

日本コレクシヨンの基礎になった作品は、浮世絵と絵本です。その他に、彫刻、漆器、陶器、根付け、罌などがあります。残念なことに、この立体作品の大部分が、一九六九年にボヘミアのベネシヨフ・ナデ・プロウチニツィー (Benesov nad Ploucnici) というお城の火事で焼失してしまいました。プラハで保存されていた浮世絵のコレクシヨンは幸いに助かりました。

資料（プラハ・ナールプルステク博物館蔵）



染めの型紙 家紋

江戸時代



型紙 撫子

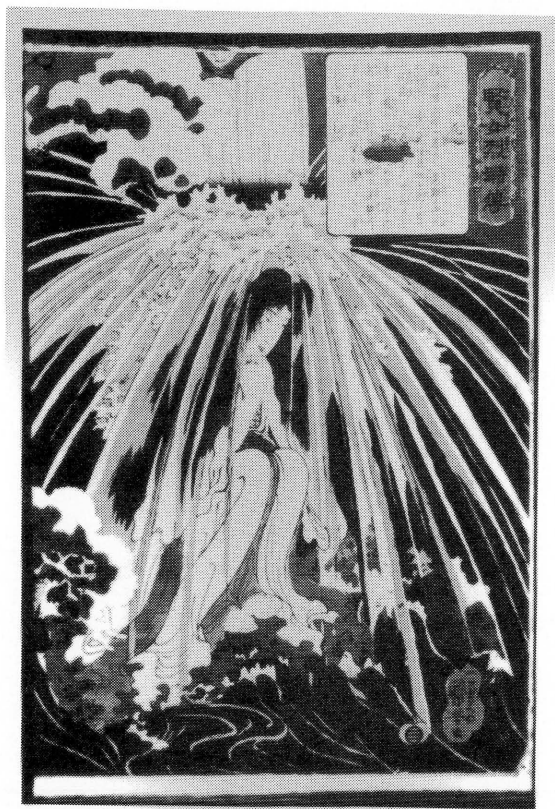


型紙 波に千鳥水車



広貞 源牛若丸・中村玉七

嘉永1年



一勇齋国芳 初花

天保12年頃

発表を終えて

私は長年にわたり日本文化、特に日本美術を自分の国に紹介し、広める仕事を続けて来られたことを大変幸せに思っております。

このフォーラムではチェコスロバキアにある日本の伝統的な美術品のスライドを沢山お見せしたのですが、出席者の活発な反応に驚きました。現在の日本人も自国の古い文化に深い関心を持ち、日本の伝統が今日も生きていることを再確認することが出来て、とても嬉しく思いました。

Marie Arleeva

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI BEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikofaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシュ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロープ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・ 日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 -『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」

○は報告書既刊

発行日 1993年7月16日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合せ先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

©1993 国際日本文化研究センター

■ 日時

1992年4月14日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

